

第53回歴史探訪の会「壺坂寺・高取城・土佐街道お城祭り」を巡る

開催日：平成 28 年 11 月 23 日(水曜日)

場所：奈良県 高取町

案内人：内海春樹（2579）

今日から本格的な冬将軍が到来するとの予報通り冷たい朝となったが、近鉄橿原神宮前駅に 19 名の会員が集合、9 時 40 分マイクロバスで出発。橿原神宮参道のきれいに黄葉した銀杏並木や明日香村の風景を見ながら進む。20 分ほどで壺坂寺を車窓から拝観。

1. 壺坂寺（車窓からお参り）

大宝三年(703 年)に奈良元興寺の弁基上人が高取山で修行し、愛用の水晶の壺を庵に収めたのが始まり。西国三十三か所観音霊場の第六番札所。八角の本堂に祀られたご本尊は、十一面千手観世音菩薩で目の観音様として広く信仰を集めてきた。車窓からは本堂・三重の塔・インド渡来の高さ 20M の大理石の大観音像等が拝める。壺坂寺が中心になり昭和 36 年より盲老人福祉事業に力を入れ、シャープ創業者“早川徳次氏”も支援に尽くされた。

バスは狭く急坂の道を走るが、お城を目指し歩く人の姿も多く見られた。八幡神社口で下車、ここの標高が約 500M あり一段と寒さを感じながら歩く。急な階段もあり約 20 分でお城に到着。



高取城跡を目指して登りはじめます。



皆さんまだ元気いっぱいです。

2. 高取城

城は、高取町から 4 キロメートル程南東にある標高 583M、比高 350M の高取山山上に築かれた山城である。山上に白漆喰塗りの天守や櫓が 29 棟建て並べられ、城下町より望む姿は

「巽高取雪かと思えば、雪ではござらぬ土佐の城」

と謡われた。“巽”は南東の方向、“土佐”とは高取の旧名である。

高取城は南北朝時代、南朝方であった越智邦澄が元弘 2 年(1332 年)に築城したのが始まりと伝えられている。その後、織田信長によって越智氏は滅ぼされ、天正 13 年(1585 年)、豊臣秀長(豊臣秀吉の異父弟)の命を受けた

本多氏が高取城に入城、石塁を築き土塀を廻らし本丸には、多聞櫓で連結された3重の大小天守、二の丸には大名屋敷が造営され、城内には三重櫓が17基建ち並んだ。また、郭内には侍屋敷も整備され、他には類を見ない広大な山城が出現した。本多氏が絶えた後、徳川譜代大名の植村家政が1,640年に入城、明治2年の版籍奉還まで14代に渡り居城した。幕末には天誅組の攻撃を防ぎ堅牢な城として知られる。しかし明治6年政府の指示で廃城となった。



案内人(内海さん)の説明を熱心に聞いています

高取城の城内の面積は約10,000平方M、周囲は約3KM、城郭全域の総面積約60,000平方M、周囲約30kmに及ぶ。日本国内では最大規模の山城で、備中松山城(岡山県)・美濃岩村城(岐阜県)とともに日本三大山城の一つに数えられる。元和元年(1615年)の一国一城令の際も重要な山城として破却を免れ、現在に至るまで石垣や石塁が残されている。

司馬遼太郎「街道を行く」でも、次のように謳われている。

「高取城は、石垣しか残っていないのが、かえって蒼古していい。

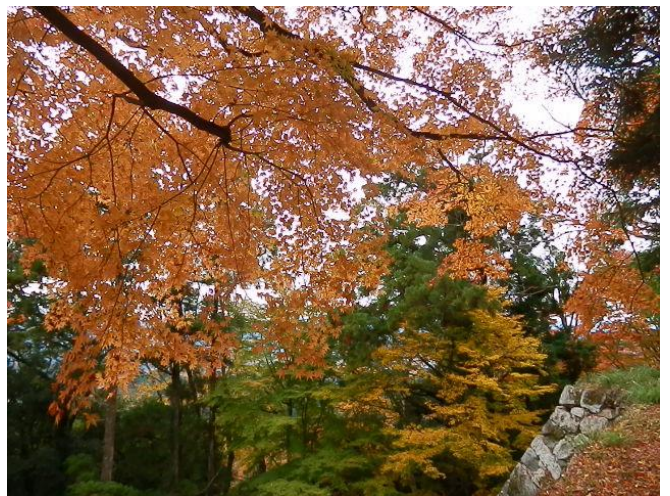
その石垣も、数が多く、種類も多いのである。登るに従って、横あいから石塁があらわれ、さらに登れば正面に大石塁があらわれるといった具合で、まことに重畳と
している。それが、自然林に化した森の中に苔むしつつ遺っているさまは、最初に
ここにきたとき、大げさにいえば、最初にアンコール・ワットに入った人の気持ち

がすこしわかるような一種のそろそろしさを感じた」と・・・

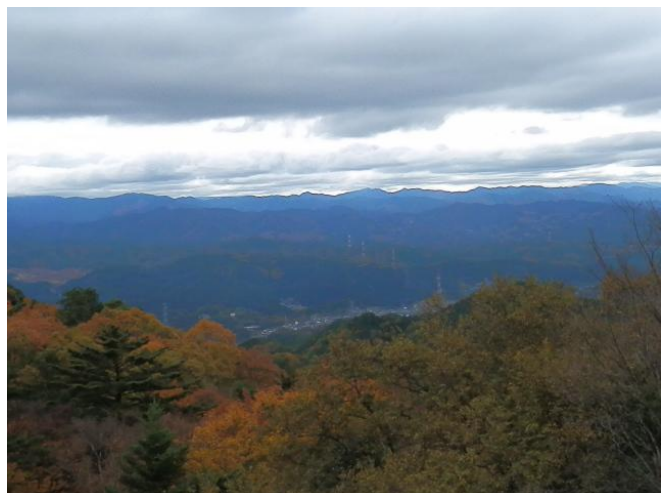
山城とは思えない規模の石垣は、“打ち込み接ぎ(うちこみはぎ)”と“算木積み(さんきづみ)”の加工程度が見事に表わされている。今日は、天守台に大勢の人が来ており、きれいな紅葉の木々の間から遠く吉野の街や大峰山系の峰が雄大に見られた。



打ち込み接ぎ(うちこみはぎ)”と“算木積み(さんきづみ)が見事な石垣



紅葉が見頃となっていました



天守台跡から大峰山系が望めます

天守台から、土佐街道へ下山道は厳しい山道でガレ場や急な階段、坂が続き悪戦苦闘する人もいたが、逆に登って来る多くの老若男女に負けず頑張る。途中、かつて籠城する場合の“人工池”や、石垣に使うため飛鳥から運ばれた“猿石”などを見る。遅れがちの人が出始めたので2班に分かれ、それぞれ進み次の“砂防公園”に到着、昼食を摂る。



急な山道を足元に気をつけながら・・・



猿石

俳句の石碑の前で 俳人 “阿波野青畝(あわのせいほ)”について。

明治32年にこの高取町で生まれた青畝は、幼い時から難聴で上級学校に進めず、好きな俳句をたしなんでいたが高浜虚子に認められ“ほととぎす”の会に入り次第に頭角を現し中心的な存在になる。

(代表作)

“ 虫の灯に 読みたかぶりぬ 耳こい児 ”
 “ 満山の つばみのままの つつじかな ”
 “ 葛城の 山懐に寝釈迦かな ”

高取町の家並みの中に“青畝”の生家がありそこからは俳句に詠われた葛城山が見え、ようやく土佐街道に近づく。



3. 土佐街道

奈良県高市郡高取町にある土佐の町は、高取藩 2 万 5000 石の城下町として発達してきた。

飛鳥時代、都造営のため連れて来られた土佐(高知県)の人々が国に帰ることが出来ず、故郷を懐かしんでつけた地名とつたえられている。

寛永7年(1640 年)植村氏が藩主として入城後、山上の高取城では日常生活が不便なため藩主をはじめ家臣の屋敷は街道筋に移された。そして次第に城下町が形成されていった。今も古い町屋が残る石畳の道が、当時のメインストリート土佐街道。正面の山が高取城である。この石畳は、阪神大震災の復旧工事に出てきた阪神国道の路面電車の石畳を利用している。

町屋は、当時ほとんどが平屋で2階は屋根裏程度となっていた。“つし2階建て”と呼ばれ、お殿様を見下ろさないという配慮からと言われる。窓には、連子格子が取り付けられ、このような昔ながらの町屋が今も街道沿いに続き江戸時代に迷い込んだかのような感覚を受ける。

街道沿いには下屋敷の門が移築されている石川医院がある。城下町としての名残が随所に見え、街道の両脇には水路があって火事の際には防火水に使えるようになっていたり、馬をつないでおく「駒止め」と呼ばれる金具が残

っている。また、町屋と町屋の間の隙間には間者等が潜めないよう板張りがなされていた。

植村家長屋門(武家屋敷) 高取藩の
筆頭家老屋敷間口 39.1M 奥行 4M 棟高 5M
江戸末期文政9年(1826年)に建設された。
近代武家屋敷表門の遺構を残す貴重な建物である。
漆喰を盛り上げた格子模様の「なまこ壁」が重厚で
美しい景観を造りだしている。
現在も子孫(高取町長)が居宅として使用。



4. たかとりお城まつり(第28回)

土佐街道沿いにフリーマーケットが開催され、メイン会場では大道芸、居合道・殺陣の実演などが披露される。
メインの“時代行列”では大勢の奴さんを先頭に、殿様・武将・お姫様・お女中・稚児・などがそれぞれの豪華な衣装をつけて行進。今年は特別に九度山から真田十勇士も続く。われわれメンバーは、多くの見物者に交じって見物や買い物を楽しんだ。



武者行列



真田軍鉄砲隊



子供達も段ボール製の甲冑にみをつつんで・・・



南京玉すだれも登場



高取城址にて

写真はたがかけさん、廣本さん、田原さん、吉田さんが撮影されたものを活用させて頂きました。